BRITISH COUNCIL

Forum

高齢社会における文化芸術の可能性：日本と英国の実践から

Tokyo & Kyoto

Forum

高齢社会における文化芸術の可能性：日本と英国の実践から

世界でも類を見ないスピードで超高齢化社会を突き進んでいる日本。2065年には人口の38.4%（約2.6人に1人）が65歳以上になると予想され、医療費の増大に加え、認知症の人々の増加、介護者の疲弊、老人の社会的孤立などさまざまな課題が浮かび上がっています。高齢化の進展は日本に限ったことではなく世界共通の課題であり、医療、福祉さまざまな面からの取り組みが行われる中で、高齢者の生活を豊かにするという意味で文化芸術の果たす役割にも注目が高まっていきています。

日本と同様に少子高齢化が急速に進んでいる英国では、美術館や劇場、ホールをはじめとする文化芸術機関が、行政や福祉・医療関係者などと協働しながら、高齢者や認知症のある方々を対象に多様な取り組みを展開しています。大学機関など研究者とも連携しながら、事業の社会的価値を可視化する効果検証も数多く行われ、高齢社会の課題に新たな切り口でアプローチできるものとして注目が集まっています。2017年には超党派議員連盟によって文化芸術が人々の健康や幸福度にいかに寄与しているかまとめた報告書（Creative Health: The Arts for Health and Wellbeing ）も発行されました。

こうした状況を受けて、ブリティッシュ・カウンシルは、英国において高齢者を対象にした先駆的な取り組みを行っている文化芸術団体の関係者を招き、東京、京都の2ヵ所でフォーラムを開催します。フォーラムではアーツカウンシル・イングランドが推進する文化芸術の多様性を高める取り組みや、英国の美術館や劇場といった芸術団体が実施している具体的な事例を紹介するほか、芸術のジャンルやセクターの枠組みを超えて、日英の関係者が高齢者を取り巻く状況や文化芸術の持つ可能性について議論を深め、新たな関係性を構築する機会を探ります。

――ブリティッシュ・カウンシル

Tokyo 東京会場

日時
2018年 3月 20日｜火
14:00－17:30

会場
東京芸術劇場
シンフォニースペース
▶東京都豊島区西池袋1-8-1

主催｜ブリティッシュ・カウンシル
助成｜ベアリング財団
協力｜ICOM京都大会組織委員会
後援｜東京芸術劇場
（公益財団法人東京都歴史文化財団）

14:00－ **開会挨拶**
マット・バーニー｜ブリティッシュ・カウンシル 駐日代表
藤原章夫｜文化庁 文化部長

14:10－ **英国と日本における高齢者に向けた文化芸術機関の取り組み**
- アビド・フセイン｜アーツカウンシル・イングランド
- アンドリュー・バリー｜ロイヤル・エクスチェンジ・シアター
- キャサリン・キャサディ｜スコティッシュ・バレエ
- ジェーン・フィンドレー｜ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー
- ジュリアン・ウェスト｜ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック
- 請川幸子｜彩の国さいたま芸術劇場 事業部

16:05－ **パネルディスカッション**
- 前田展弘｜ニッセイ基礎研究所 生活研究部 主任研究員
  東京大学高齢社会総合研究機構 客員研究員
- 杉山美香｜東京都健康長寿医療センター研究所
  自立促進と介護予防研究チーム 研究員
- アビド・フセイン
- アンドリュー・バリー
- キャサリン・キャサディ
- ジェーン・フィンドレー
- ジュリアン・ウェスト
- 請川幸子

モデレーター：湯浅真奈美｜ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長

Kyoto 京都会場

日時
2018年 3月 22日｜木
14:00－17:30

会場
京都国立近代美術館 講堂
▶京都府京都市左京区岡崎円勝寺町26-1

主催｜ブリティッシュ・カウンシル
助成｜ベアリング財団
協力｜ICOM京都大会組織委員会

14:00－ **開会挨拶**
星野有希枝｜文化庁 地域文化創生本部 総括・政策研究グループリーダー

14:10－ **英国と日本における高齢者に向けた文化芸術機関の取り組み**
- アビド・フセイン｜アーツカウンシル・イングランド
- アンドリュー・バリー｜ロイヤル・エクスチェンジ・シアター
- キャサリン・キャサディ｜スコティッシュ・バレエ
- ジェーン・フィンドレー｜ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー
- ジュリアン・ウェスト｜ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック
- 柿塚拓真｜日本センチュリー交響楽団マネージャー
  豊中市立文化芸術センター事業プロデューサー

16:05－ **パネルディスカッション**
- 日下菜穂子｜同志社女子大学現代社会学部 教授
- 河本歩美｜社会福祉法人京都福祉サービス協会
  高齢者福祉施設 西院 所長
- アビド・フセイン
- アンドリュー・バリー
- キャサリン・キャサディ
- ジェーン・フィンドレー
- ジュリアン・ウェスト
- 柿塚拓真

モデレーター：湯浅真奈美｜ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長

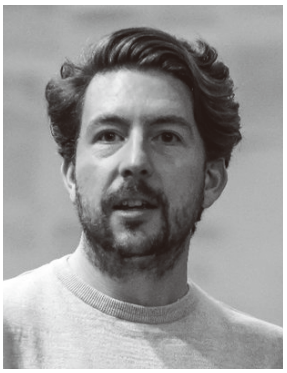
アビド・フセイン | Abid Hussain

アーツカウンシル・イングランド　ダイバーシティ担当ディレクター

イングランドの芸術セクターの発展を担う公的機関、アーツカウンシル・イングランドのダイバーシティ担当ディレクター。平等性、多様性、インクルージョンに関する戦略を主導している。芸術機関やそのリーダーの多様性を推進するための助成プログラム「チェンジ・メーカーズ」および「エレベート」の戦略開発の指揮をとるほか、2012年のロンドン五輪を契機にスタートした障害のあるアーティストの活動を支援するプログラム「アンリミテッド」にも積極的に関与している。インターナショナル・ビジター・リーダーシップ・プログラム（IVLP）修了生、英米の文化・社会・教育的交流を推進するジョン・アダムズ・ソサイエティのメンバーでもあり、これまでヨーロッパ、東アジア、南アフリカ、ニュージーランド、北米など各地での国際会議でも登壇している。

アンドリュー・バリー | Andrew Barry

ロイヤル・エクスチェンジ・シアター　エルダーズ・プログラム・マネージャー



英国マンチェスターを拠点に活動するシアター・アーティストであり演出家。ロイヤル・エクスチェンジ・シアターが行うエルダーズ（高齢者）プログラムの指揮をとるほか、子どものための新しい演劇を制作するカンパニー、ゴブリンのアソシエイト・ディレクターを務める。ロンドン大学バークベック・カレッジ修了。プロ／一般のパフォーマーとともに独自の作品を制作。近年携わった作品には『Moments That Changed Our World』、『The Space Between Us』（ともにロイヤル・エクスチェンジ・シアター）、『The Nutcracker and the Mouseking』（コーナーストーン、ゴブリン共同制作）など。また、「14:18 NOW」（第一次世界大戦開戦・終戦から100周年を機に開催されている大規模プログラム）の一環で、ソンムの戦いから100年を迎えた2016年に英国全土で展開され、高い評価を得たジェレミー・デラーのパブリックアート『We're Here Because We're Here』のアソシエイト・ディレクター（北西部）を務めた。

キャサリン・キャサディ | Catherine Cassidy

スコティッシュ・バレエ　ディレクター・オブ・エンゲージメント

コンテンポラリーダンスの振付家、コミュニティダンス・アーティストを経て1999年に自身のダンスカンパニー、トピアリーを設立。子どもおよび若者向けの新しいダンスや音楽パフォーマンスを制作し、アーツカウンシル・イングランド、スコティッシュ・アーツカウンシルの助成を受け英国国内をツアーした。両機関への専門アドバイザーを務めた経験もある。2010年よりスコティッシュ・バレエのエンゲージメント・チームの指揮をとり、新しいダンス・ヘルス・プログラムの開発を手がけてきた。これには100人以上の参加者に向けて毎週開催されるバレエ・セッションや、同団の高齢者を対象にした「エルダー・ダンスパフォーマンス・カンパニー（SBEC）」、エジンバラおよびグラスゴーで毎週開催される3つの「ダンス・フォー・パーキンソンズ」クラスのほか、新しく加わった「タイム・トゥー・ダンス」認知症プログラムが含まれる。また現在、2018年秋に開始予定の多発性硬化症の人のためのプロジェクトに先がけリサーチを行っている。

ジェーン・フィンドレー | Jane Findlay

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー　ヘッド・オブ・ラーニング

過去11年間にわたり大英博物館、国立海洋博物館、ケンウッド・ハウス、ロンドン交通博物館などの英国の博物館や美術館で、さまざまな規模や内容のラーニング／エンゲージメントの取り組みに携わってきた。とくに解説とデジタル技術を活用した観客層の拡大に力を入れながら、あらゆる観客層を対象としたラーニングプログラムやプロジェクトを手がけてきた。現在はダリッチ・ピクチャー・ギャラリーのヘッド・オブ・ラーニングを務め、コミュニティの高齢化を、美術館が芸術への積極的な参加を促すことによってサポートする新しい仕組みを探っている。芸術セクターと医療・福祉セクターがともに連携しながら取り組む包括的なアプローチをとっており、美術館の中で高齢者に身体を使って取り組んでもらう活動や、サウスロンドンおよびモーズレイ・メンタルヘルス・トラストとのパートナーシップが挙げられる。海外との新規パートナーシップ構築や、ラーニング分野での交流にも関心がある。

ジュリアン・ウェスト | Julian West

ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック　ヘッド・オブ・オープンアカデミー

オーボエ奏者。ウィグモア・ホール、グラインドボーン・オペラ、ブリテン・シンフォニアや多世代型芸術カンパニー、マジック・ミーなどの英国を拠点とする多数の組織のために革新的なクリエイティブ・ラーニングや参加型プロジェクトを開発している。ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックのクリエイティブ・ラーニング／参加型プログラムであるオープンアカデミーの指揮をとる。認知症（とくに重度）の人のための創造的な音楽づくりの手法として最もよく知られるプログラムのひとつである「ミュージック・フォー・ライフ」のプロジェクト・リーダーとして17年間にわたって音楽家の仲間とともに活動してきた。このほかウェルカム・トラストの呼びかけにより集まった学際的チーム「クリエイテッド・アウト・オブ・マインド」の共同ディレクターを務め、2016〜18年にかけてはウェルカム・コレクションのハブでレジデンシーを行い、科学と芸術によって認知症に対する新しい見方を形成し、理解を促進する活動にも携わっている。

請川幸子 | うけがわ・さちこ

東京会場

彩の国さいたま芸術劇場 事業部

舞踊学・舞踊人類学を修めた後、2014年より彩の国さいたま芸術劇場にて主に舞踊部門の事業にたずさわり、国際的な振付家による招聘公演から地域コミュニティとの協働プログラムまで、舞踊の分野で幅広い活動をおこなってきた。近年は、彩の国さいたま芸術劇場が推進する高齢者のための芸術プログラムの担当として、今年9月に開催を予定している「世界ゴールド祭」のキュレーションをはじめ、高齢者に特化したプログラム開発を担っている。

前田展弘 | まえだ・のぶひろ

東京会場

ニッセイ基礎研究所 生活研究部主任研究員

東京大学高齢社会総合研究機構 客員研究員

2004年ニッセイ基礎研究所入社後、2009年より東京大学高齢社会総合研究機構客員研究員。専門はジェロントロジー（高齢社会総合研究）。人生100年時代をより良く生きていける未来社会の実現に向けて、行政・企業・生活者とつながりながら、高齢期の生活課題及び高齢社会の課題の解決に向けた幅広い研究及び事業を展開。2017年４月からは（一社）高齢社会共創センターの事業も手がけている。主な著書は、『東大がつくった高齢社会の教科書（改訂版）』（共著、東大出版会、2017年）など。

杉山美香 | すぎやま・みか

東京会場

東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と介護予防研究チーム研究員

2000年聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室研究員。2001年より東京都老人総合研究所精神医学部門客員研究員、介護予防緊急対策室客員研究員などを経て2009年より東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）自立促進と介護予防研究チーム研究員。臨床心理学博士。著書：『痴呆予防のすすめ方 ファシリテートの理論・技法とその事例』『失敗しない認知症予防のすすめ方』（真興交易医書出版部）。

柿塚拓真 | かきつか・たくま

京都会場

日本センチュリー交響楽団 マネージャー

豊中市立文化芸術センター 事業プロデューサー

福岡第一高等学校音楽科、相愛大学音楽学部卒業。社会保険庁福岡社会保険事務局（当時）を経て財団法人大阪府文化振興財団（大阪センチュリー交響楽団事務局、当時）に入局。2016年度より日本センチュリー交響楽団が豊中市立文化芸術センターの指定管理を担うことになり、豊中市立文化芸術センター事業プロデューサーを兼務する。

日下菜穂子 | くさか・なほこ　京都会場

同志社女子大学現代社会学部教授、博士（教育心理学）、臨床心理士

高齢者の自律的な社会参加を促進する心理的介入法の開発をテーマに研究。ワンダフル・エイジング・プロジェクトを主宰し、自治体との連携の下で65歳からのライフ・デザインの「生きがい創造教室」、高齢者が講師になって学び合う「ワンダフル大学院」、高齢者の知恵を社会に活かす「ワンダフル・ラボ」の実践・研究に取り組む。日本老年行動科学会常任理事他。主著：『ワンダフル・エイジング：人生後半を豊かに生きるポジティブ心理学』（ナカニシヤ出版、単著）、『人生の意匠：自己・社会・超越性からのアプローチ』（ナカニシヤ出版、編著）ほか。

河本歩美 | こうもと・あゆみ　京都会場

社会福祉法人京都福祉サービス協会 高齢者福祉施設 西院 所長

1994年大学卒業後、福祉業界に就職。現在の法人に入職してからは、高齢者の在宅生活を支援するサービスを中心に従事している。住み慣れた地域、環境で生活を継続するためには、高齢者や認知症のことを理解する地域をつくることが必要との見解にたち、勤務施設を中心に地域交流の仕掛けや地域住民の居場所づくりに取り組んでいる。高齢者がのぞむ暮らしの実現に向け、個々が力を発揮し、社会とのつながりを失うことなく充実した生活を送れるような活動を提供すべく、様々な取り組みとの連携を図っている。

Photograph: Dulwich Picture Gallery